



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

| | |
|------------|---|
| Title | 子どもの自尊感情・自己肯定感等についての定義及び尺度に関する文献検討：肢体不自由児を対象とした予備的調査も含めて(fulltext) |
| Author(s) | 田島,賢侍; 奥住,秀之 |
| Citation | 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 64(2): 19-30 |
| Issue Date | 2013-02-28 |
| URL | http://hdl.handle.net/2309/132621 |
| Publisher | 東京学芸大学学術情報委員会 |
| Rights | |

子どもの自尊感情・自己肯定感等についての 定義及び尺度に関する文献検討

—— 肢体不自由児を対象とした予備的調査も含めて ——

田 島 賢 侍*・奥 住 秀 之**

特別支援科学講座

(2012年9月14日受理)

I はじめに

子どもの自尊感情や自己肯定感は、今日の学校教育で注目されているトピックの1つである。また、これとよく似た言葉として、「自己イメージ」、「自己価値」、「自己肯定感」、「自己効力感」、「自己尊重」、「自己評価」、「自尊心」なども使われている。しかし、これらの用語の共通点や差異は必ずしも整理されているとは言い難く、それを測る尺度も開発されてはいるが、その整理も十分ではない。

本論では、この自尊感情や自己肯定感において次の2点の検討を行う。第一に、自尊感情とそれに関連する用語について、わが国の著名な事典・辞典・ハンドブック（以下「事典等」とする）からそれらの定義について調査・整理を行う。第二に、自尊感情に関する尺度について、国内で発表された、また海外で開発され日本語版が開発された尺度を整理する。加えて、自尊感情測定尺度（東京都版）（東京都教職員研修センター、2011）を用いて、肢体不自由のある児童・生徒の自尊感情の特徴を予備的に検討する。

II 自尊感情ならびに自己肯定感における事典等における定義

ここでは、わが国で発刊されている主要な心理学、教育学、特別支援教育学に関する事典・辞典・ハンドブックにおける「自尊感情」、「自己イメージ」、「自己価値」、「自己肯定感」、「自己効力感」、「自己尊重」、

「自己評価」、「自尊心」という8つの用語について、その特徴を検討する。また自尊感情に関連する英語として頻繁に使われる Self-Esteem の訳語についても検討を行う。取り上げた事典等は、心理学に関するもの12冊、特別支援教育を除く教育学に関するもの8冊、特別支援教育学に関するもの12冊の計32冊である。

これらの32冊の事典等のうち8つの用語それぞれ自体が掲載されていたものは24冊で、掲載率は75%であった（以下24冊をA～Xで表記、表1）。その内訳は心理学12冊、教育学7冊、特別支援教育学5冊であり、心理学の掲載率は100%、教育学は88%、特別支援教育学は42%と、8つの用語はとりわけ心理学の分野で一般的に用いられているようである。各用語の定義についてみてみる。

(1) 自己イメージ

Lでは「自分の性格や能力、身体的特徴などに関する、比較的永続した自分の考えである」と定義している。

(2) 自己価値

Lにおいて、自尊感情と同義とされている。

(3) 自己肯定感

4冊中2冊（F、V）で定義が述べられている。Fでは、自己肯定感に近い概念として「自己有能感」という用語を用いて説明し、「自分の可能性を信じ、自分ができるんだという自信をもち、肯定的に自己を認識す

* 東京都立城南特別支援学校／東京学芸大学大学院教育学研究科

** 東京学芸大学特別支援科学講座

表1 心理学, 教育学, 特別支援教育学の事典・辞典・ハンドブックにおける自尊感情関連用語

| | 書籍名 | 発行元 | 発行年 | 自己イメージ | 自己価値 | 自己肯定感 | 自己効力感 | 自己尊重 | 自己評価 | 自尊感情 | 自尊心 |
|--------|----------------------|---------|------|--------|------|-------|-------|------|---------|------|-----|
| 心理学 | A カウンセリング辞典 | ミネルヴァ書房 | 1999 | | | | ○ | | | ● | |
| | B 精神分析事典 | 岩崎学術出版社 | 2002 | | | | | | ● | | |
| | C 心理学辞典 | 丸善 | 2004 | | | | | | ○ | ● | |
| | D 精神保健福祉用語辞典 | 中央法規出版 | 2004 | | | | ○ | | | | ● |
| | E 心のケアのためのカウンセリング大事典 | 培風館 | 2005 | | | | | | | | ● |
| | F こころの問題事典 | 平凡社 | 2006 | | | △1 | | | | | |
| | G 心理学総合事典 | 朝倉書店 | 2006 | | | | △2 | | ○ | ● | ○ |
| | H 応用心理学事典 | 丸善 | 2007 | | | | ○ | | ○ | ● | |
| | I アイゼンク教授の心理学ハンドブック | ナカニシヤ出版 | 2008 | | | | ○ | | | ● | ○ |
| | J カウンセリング心理学事典 | 誠信書房 | 2008 | | | ○ | ○ | | | ● | |
| | K 詳解 子ども虐待事典 | 福村出版 | 2009 | | | | | | | | ● |
| | L 心理学辞典 | 有斐閣 | 2010 | ○ | ●1 | △3 | ○ | ●1 | ○ | ●1 | |
| 教育学 | M 新教育学大事典 | 第一法規出版 | 1990 | | | | | | ○ | | |
| | N 新教育事典 | 勉誠出版 | 2002 | | | | | | ○ | | |
| | O 新版 現代学校教育大事典 3 | ぎょうせい | 2002 | | | | ○ | | ●2 | ●2 | |
| | 現代教育用語辞典 | 北樹出版 | 2003 | | | | | | | | |
| | P 新版 学校教育辞典 | 教育出版 | 2003 | | | | ○ | ●3 | ○ ●3 | ●3 | ●3 |
| | Q 教育学用語辞典 | 学分社 | 2010 | | | | | | ○ | | |
| | R 第三版 学習指導用語事典 | 教育出版 | 2010 | | | | ○ | | ○ | | ○ |
| | S 新版 教育小事典 第3版 | 学陽書房 | 2011 | | | | | | ○ | ○ | |
| 特別支援教育 | ハンディキャップ教育福祉事典 I | 福村出版 | 1994 | | | | | | | | |
| | 障害児教育大事典 | 旬報社 | 1998 | | | | | | | | |
| | 障害とリハビリテーション大事典 | 湘南出版社 | 2000 | | | | | | | | |
| | 聾・聴覚障害百科事典 | 明石書房 | 2002 | | | | | | | | |
| | T 障害児発達支援基礎用語事典 | 川島書店 | 2004 | | | | ○ | | | | |
| | U LD・学習障害事典 | 明石書店 | 2006 | | | | △4 | | | ● | |
| | 発達障害基本用語事典 | 金子書房 | 2008 | | | | | | | | |
| | 盲・視覚障害百科事典 | 明石書房 | 2009 | | | | | | | | |
| | V 特別支援教育大事典 | 旬報社 | 2010 | | | ○ | | | | | |
| | 自閉症百科事典 | 明石書店 | 2010 | | | | | | | | |
| | W LD・ADHD等関連用語集 第3版 | 日本文化科学社 | 2011 | | | | | | ○ | ● | ○ |
| | X 発達障害事典 | 明石書店 | 2011 | | | | | | | | ● |

●: 「Self-Esteem」の訳語として記載。

●1: 心理学辞典: 自己価値, 自己尊重, 自尊感情を Self-Esteem の訳としているが, 自尊感情の項目に記載。

●2: 新版現代学校教育大事典 3: 自己評価と自尊感情両方の英訳が Self-Esteem。

●3: 新版学校教育辞典: Self-Esteem の訳を自尊感情, 自尊心, 自己尊重, 自己評価。

△1: こころの問題事典: 自己肯定感に近い概念として「自己有能感」。

△2: 心理学総合事典: 自己効力感を「自己効力」と表記。

△3: 心理学辞典: 自己肯定感を「自己肯定化」と表記。

△4: LD・学習障害事典: 自己効力感を「自己効力」と表記。

ること」としている。Vでは、自己受容や自尊感情といった類似している概念との違いは明確ではないとしながら、自己肯定感は「ありのままの自分を受け止め、自己の否定的な側面もふくめて、自分が自分であっても大丈夫という感覚である」と定義し、障害児は自己の能力や同年代の友人・クラスメイトとの良好な関係が形成されにくいため、自己肯定感が低くなっていると指摘している。自己肯定感の心理的影響について、Jはカウンセリング実施者、非行少年、並びに摂食障害改善に関して自己肯定感が必要であるとの指摘しており、Lは全体的な自己イメージを肯定することは、外部からの脅威への有効な対処法となると説明している。

(4) 自己効力感

12冊中7冊(D, H, I, J, L, O, T)で、Banduraの定義である「行動を起こす前に自分の能力から効果的に処理することを予測する」に触れられており、それ以外の5冊においても同様の定義としている。Banduraの提示する自己効力感に影響を与える4点(成功体験、他者の行動観察、自己強化や他者からの説得的な暗示、ストレスを軽減させるための身体状態の向上)については4冊(D, L, P, T)に触れている。自己効力感にはある行動がどのような結果を生むかを予測する結果予期と、ある結果のために必要な行動を予測する効力予期の2つに触れていたのは2冊であった(H, O)。Jでは自己効力感を通して、人は思考や行動、感情をコントロールしているとし、高い自己効力感が心身のストレス反応を予防すると指摘している。Rでは、自分はどのような人間なのかという自己意識、またどれくらい価値があるのかという自尊心、そして自己効力感によって自己の形成がなされると説明している。

(5) 自己尊重

LとPに記述があるが、両方とも自尊感情と同義であるとしている。

(6) 自己評価

「学習・学校評価的側面」と「自己の内面評価的側面」の2つの側面があることが指摘できる。学習・学校評価的側面は6冊(M, N, P, Q, R, S)に記され、自己評価を取り上げている教育学事典等の7冊中6冊が学習・学校評価的側面の自己評価について説明している。学習・学校評価的側面は、教育的意義での自分の学習や活動を自分で評価する「学習者自身の自己評価」(M, N, P, R, S)と、教員評価、教育活動

や学習状況、学校運営について自ら点検および評価する「学校運営面での自己評価」(Q, S)に大別することができる。

一方、自己の内面評価的側面については7冊(B, C, G, H, L, O, W)にあり、自己評価を掲載している心理学4冊全てがこの側面について説明している。Cは自己の内面評価的側面の自己評価を自尊感情と同義とし「自分自身や自分の意見などについての評価」、Lでは自己評定と同義とし「内省に基づく自分自身の能力・態度・性格・興味関心などを評価する方法」であるとしている。Oでは、狭義の意味で「自分自身で学業、行動、性格、態度等を評価し、それによって得た情報によって自分を確認し、自分の今後の学習や行動を改善・調整するという一連の行動」であるとし、広義では「生徒がみずからの人となりや学習の状態や態度等を反省してみる」と定義している。Hでは、「自尊感情を感じるため、自分自身を評価することが自己評価」であるとし、自己評価は社会や集団の中の他者と比較をすることであり、自尊感情を維持するために、良好な状況下では優れている者と、上手くいっていない状況下では自分よりも恵まれていない者と比較をする傾向があると指摘している。Bでは、フロイトの「自我」に関連して触れられ「自我による自己の価値評価」と定義し、自我が自己に対して抱く基本的信頼感、優越感、劣等感が自己評価に影響を与えるとしている。Gでは就学前児、児童期以降、成人の3つの自己評価について触れ、就学前期では自分自身を客体化することが困難なため周囲の評価が自己評価として認識され、児童期以降は学業・スポーツ分野などで自己評価が分化し、集団内の順位やテストの点数といった客観的な他者評価と自己評価が一致するようになるとしている。成人の自己評価については、運転ドライバーの多くが実際よりも過大に自分の運転技術を高く評価していることを例にあげ、過信傾向に陥ることがあると指摘している。Wは、子どもの自己意識の発達にともない、「理想の自己」と「現実の自己」を意識するようになるとし、発達障害がある場合には高すぎる理想や失敗経験の積み重ねが自己評価の低下につながりやすいと指摘している。

(7) 自尊感情

12冊中8冊(A, C, J, L, O, P, U, W)が「自分自身を肯定的に評価する気持ち」と同義の定義をしている。自尊感情の特徴としては、他の用語と同義とする記載が多く見られる。Cでは自尊感情と自己評価は同義とし、Lでは自己価値と自己尊重を自尊感情と

同義としている。Pでは、Self-Esteemの訳語を自尊感情、自尊心、自己尊重、自己評価であるとしている(自己評価については自尊感情同様、Self-Esteemの訳語としながらも、学習・学校評価の側面の自己評価について項目を別立てし説明している)。Oは、「自尊心、自己尊重との違いを、自分が好き-嫌い、自分に満足-不満足という価値評価的な判断で起こる肯定的-否定的感情の両側面を踏まえている点」であると定義している。自尊感情の心理的影響について、Hでは自分が価値のある人と感じありのままの自分を尊敬できることが、自尊感情が高い状態だと指摘している。また自尊感情が高いことは望ましい行動につながるとし、自尊感情が高い子どもは主張的、自立的、創造的であり(O)、積極的に経験を重ねることができるため、満足感を得て自分に対しても他者に対しても受容的になれるとしている(L)。Wでは、自尊感情が高いと障害を乗り越え目標を達成しようとする傾向があると指摘している。Jでは、高い自尊感情は自身の良い面も悪い面も受け入れることができ、自分自身を大切に思うことができるとし、低い自尊感情は自分を過小評価するため、自己の価値を見いだせなかったり、自己嫌悪に陥ったり、劣等感を抱きやすいと指摘している。非行への対応において、保護者・教師・地域社会の協力の下、共同性、夢、自尊感情を育むことが重要であるとし(S)、自尊感情は日常生活における問題を処理する能力のある人間として、そして幸福に値する人間としての自己を体験する能力であるとの説明もある(U)。Wでは、自尊感情を「個人的自尊感情」と「集合的自尊感情」に分けることができるとし、前者は自分自身に対し、後者は自分が所属する社会的集団に対する自尊感情であるとしている。親の養育態度が自尊感情に影響を与えるという記載や(A, L, O)、自尊感情と学業に正の相関を説明するものもある(U)。一時的な良い気持ちが自尊感情ではなく、その気持ちが根付いていなければ自尊感情とは言えないとする指摘も見られる(U)。

(8) 自尊心

9冊のうち5冊(D, G, P, R, X)が定義を示している。Rでは、「自分にどれくらい価値があるのかということ」であるとし、Xも同様である。Dでは自尊心ではなく「自尊」という項目に、「心の中で自己のあり方について自己評価をし、自分について健康的な自信をもつことであり、自己ケアする心(自尊)をもつこと」と記載されている。Pでは自尊感情と同義とし、「自己への価値、能力、適正などの評価が肯定的である

こと」としている。一方、Gでは「個人の内面にある自己価値の基準つまり自己評価である私的自尊心と、集団の中で他者から尊重され、敬意を払われていると信じることである社会的自尊心があるとし、この2つの自尊心が結びつくことで個人のプライドが形成される」としている。自尊心が低下する要因としては、発達障害のある子どもが失敗や注意・叱責、友人と違う存在であることに気づくことで低下するケース(W, X)、虐待の結果自己卑下の感情により低下につながるケース(K)、問題に対処する方法をもっておらず、社会的・心理的に孤立した状況において低下するケースがあるとしている(E)。他者からの誹謗中傷・非難などにより自尊心が低下するケースにおいては、それに対して攻撃的な反応をとるという行動で傷ついた自尊心を回復することがあるという指摘もある(G)。一方、自尊心を高める方法としては、自分の長所・短所を現実的に理解し成功体験を積み重ねること、本人が自分と公平・正確に比較できる適切な集団をもつこと(X)、自分が所属する集団への愛着や集団の成功が自尊心を高める要因となることが挙げられている(I)。個人では解決できない問題に対して、個人や家族、地域等を単位とし組織されたセルフ・ヘルプ・グループに参加し、メンバー同士がかかわることで自尊心の回復が促されるケースも記載されていた(E)。

(9) 小括

特別支援教育学事典等においては、2004年以降から関連用語の掲載がなされていることから、この分野で比較的最近になって注目された用語であると推測できる。また8用語の中で最も多く掲載されていたのは「自己評価」の13冊で、教育学事典等の8冊中6冊に掲載されていることから、この用語は教育学で比較的焦点が当てられていると推測される。「自己効力感」と「自尊感情」は12冊ずつ掲載されており、どちらも心理学7冊、教育学3冊、特別支援教育学2冊の掲載であり、心理学で一般的に用いられつつ、教育学の領域でも一定の注目を得ていると考えられる。自尊感情に関連する英訳として用いられることの多い「Self-Esteem」は、今回の調査においては16冊に掲載されており(心理学11冊、教育学2冊、特別支援教育学3冊)、日本語訳として「自尊感情」が11冊、「自尊心もしくは自尊」が5冊、「自己評価」が3冊、「自己尊重」が1冊であった。今後は国際的に用いられている事典、あるいは、学術研究雑誌での用いられ方、さらにはこの8つ以外に関連する用語の確認など、検討を進める必要があるだろう。

Ⅲ 我が国における自尊感情等に関する尺度

自尊感情等の構成概念に関連する心理尺度がこれまでいくつか開発されている。それらには、自尊感情自体を調べる尺度や自尊感情を因子の1つとする尺度が

あり、また方法論としても自己記述式や他者による行動観察評定のものなどある。ここでは、わが国で開発された、あるいは翻訳されている自尊感情等に関連する尺度について概観してみる。文献データベース等を用いて筆者が確認できた18尺度を以下見てみる(表2)。

表2 我が国における自尊感情関連の心理尺度

| | 尺度名 | 作成者・団体・訳者 | 作成年 | 項目数 | 因子 | 件法 | 対象 |
|---|----------------------------------|--|--------------------------------|----------------|------------|------------------|---|
| 自己記述式 | 自己認知の諸側面測定尺度 | 山本・松井・山成 | 1982 | 35 | 11 | 5 | 高校生～成人 |
| | 自尊感情尺度 | 山本・松井・山成(訳) 桜井(訳) Mimura, C., & Griffiths, P(訳) (Rosenberg) | 1982 2000 2007 (1965) | 10 | 1 | 5 4 4 4 | 高校生～成人 (子どもへの転用可) |
| | 認知されたコンピテン ス測定尺度(日本語版) | 桜井(訳) (Harter) | 1983 (1979) | 28 | 4 | 4 (*1) | 小学3年生～中学生 |
| | 自己肯定意識尺度 | 平石 | 1990 | 41 | 2次元 6因子 | 5 | 中学生～大学生 |
| | 児童用自己意識尺度 | 桜井 | 1992 | 19 | 2 | 4 | 小学生高学年 |
| | 相互独立・相互協調 的自己観尺度 | 木内 | 1995 | 16 | 1 | 4 (*2) | 大学生～成人 |
| | 特性的自己効力感尺度 | 成田・下仲・中里・河合・佐藤・ 長田(訳) (Sherer et al.) | 1995 (1982) | 23 | 1 | 5 | 中学生以上 |
| | 日本語版 PANAS | 佐藤・安田(訳) (Watson et al.) | 2001 (1988) | 16 | 2 | 6 | 高校生以上 |
| | 子ども用5領域自尊 心尺度 | 林(訳) (Pope et al.) | 2004 (1988) | 16 | 3 | 3 | 小学生高学年～中学生 |
| | 「自己肯定感」尺度 | 久芳・齋藤・小林 | 2005 | 8 | 1 | 4 | 小学生～大学生 |
| | 状態自尊感情尺度 | 阿部・今野 | 2005 | 9 | 1 | 5 | 大学生 |
| | SPPC(日本語版) | 平松(訳) (Harter) | 2008 (1985) | 36 | 2次元 6因子 | 5 | 大学生 |
| | 子ども用5領域自尊 心尺度 | 中山・西山・柳澤(訳) (Pope et al.) | 2011 (1988) | 40 (*3) | 6 | 4 | 小学生(1～6年) |
| | 自尊感情測定尺度(東京都版) | 東京都教職員研修センター | 2011 | 22 | 3 | 4 | 小学生～高校生 |
| | 日本版 Brief Core Schema Scale | 内田・川村・三船・濱家・松 本・安保・上埜(訳) (Fowler et al.) | 2012 (2006) | 24 | 4 | 4 (*4) | 大学生 |
| | 障害児を育てる母親の 自己成長感尺度 | 橋本・奥住・熊井 | 2010 | 18 | 3 | 4 | 障害児を育てる母親 |
| | 自己記述式兼他者評価式 | PedsQL日本語版 | 小林・池田・上別府(訳) (Varni JW) | 2007 (1999) | 23 | 4 | 5 |
| 子どもの強さと困難 さアンケート (自尊感情関連は5因 子中2因子) | | Matsuishi et al (Goodman R) | 2008 (1997) | 25 (*5) | 5 (*6) | 3 | ・11～16歳 ・4～16歳に対する 教員の他者評価 ・3～16歳に対する 保護者の他者評価 |
| 子ども版 QOL 尺度 (自尊感情関連は6因 子中1因子) | | 古荘(訳) (Ravens) | 2009 (1998) | 24 (*7) | 6 (*8) | 5 | ・4～16歳 ・4～16歳の子ども をもつ保護者 |
| 他者評価式 | 自尊感情の傾向を把握 するための「他者 評価シート」 | 東京都教職員研修センター | 2012 | 24 | 6 | 4 | 自己評価を行うことが 難しい特別支援学校・ 特別支援学級の児童・ 生徒、就学前児などに 対して教員等が実施 |

*1: 2回の2件法による4段階評価。

*2: 1項目に1対(A「相互協調自己観」的質問とB「相互独立自己観」的質問)の質問が用意され、ABどちらかの質問に近い項目について4件法で回答。

*3: 虚偽尺度5項目を含む計40項目。

*4: 「はい」か「いいえ」で回答し、「はい」の場合はどの程度感じるかについて4件法で回答。

*5: 自尊感情に関連するのは10項目。

*6: 5因子中の2因子が自尊感情。

*7: 自尊感情に関連するのは4項目。

*8: 6因子の中の1因子が自尊感情。

まず回答方法についてみると、自分自身で質問に回答する「自己記述式」(15尺度)、質問内容は同じだが本人用と保護者・教員用の2通りある「自己記述式兼他者評定法」(3尺度)である。各尺度の詳細ならびに特徴を見ていこう。

(1) 自己記述式尺度

「自己認知の諸側面測定尺度」(山本ら, 1982)は、大学生を対象とし、自己についての認知側面と自己評価との関係の性差を検討している。11因子(「社交(社交性に関する質問)」、「優しさ」、「生き方(生き方に対する満足)」、「まじめさ」、「スポーツ能力」、「性的経験に関するもの」、「経済力」、「学校の評判(出身校の社会的評判)」、「知性(知的能力に関する自信)」、「容貌(容姿に関する自信)」、「趣味や特技(趣味・特技の有無)»)あり、各因子について3項目(「社交」と「スポーツ能力」は4項目)の35項目、5件法での回答。因子数が多いため、多面的に自己認知を捉えることができること、また「経済力」や「学校の評判」といった因子があることが特徴的である。

「自尊感情尺度」はRosenbergが1965年に作成した「Self-Esteem Scale」の翻訳で、子どもから成人まで用いることができる。1因子10項目で、山本ら(1982)の翻訳は5件法、その他は4件法での回答である。訳者により質問内容と回答の翻訳が多少異なり、桜井(2000)は日本語としてわかりやすい表現にし、Mimura, C., & Griffiths, P. (2007)は、忠実な翻訳のために逆翻訳をし日本語版と英語版の項目表現の等価性について検討を行った(内田ら, 2010)。

「認知されたコンピテンス測定尺度の日本語版」はHarterが1979年に作成した「認知されたコンピテンス測定尺度」を桜井(1983)が翻訳したものである。「Cognitive(学習)」、「social(友人関係)」、「physical(スポーツ・運動)」、「general self-worth(全般的な自分の生き方)」の4因子からなり、それぞれ7項目からなる計28項目の尺度である(例:(イ)友だちをつくることはむずかしいと思います。(ロ)友だちをつくることは、とてもかんたんです、などについて、「だいたいあてはまる」と「よくあてはまる」を選択する)。対象は小学3年生から中学生で、比較的低位年齢児を対象としている。Harterの原尺度と日本語版は高い信頼性と妥当性がある(桜井, 1983)。

「自己肯定意識尺度」は、青年期(中学生から大学生)における自己意識の発達における自己肯定性次元の個人差を測定する41項目からなる尺度である(平石, 1990)。この尺度は「対自己領域」と「対他者領

域」の2次元からなり、対自己領域に3因子(「自己受容(自己の評価意識的側面)」、「自己実現的態度(行動についての動機的側面)」、「充実感(現在の自己に対する感情的側面)»)19項目、対他者領域が3因子(「自己閉鎖性・人間不信(他者に対する感情的側面)」、「自己表明・対人的積極性(対人行動的側面)」、「被評価意識・対人緊張(対他者関係での評価意識的側面)»)の22項目から成る。「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で、自己への意識と他者への意識との違いを検討できる。

Fenigsteinらが1975年に作成した「自己意識尺度」とその日本語版(諸井, 1987)、および菅原(1984)の尺度などを参考に、桜井(1992)は「児童用自己意識尺度(Children's Self-Consciousness Scale: CSCS)」を作成した。自分の容姿や態度が他者にどう映っているのかの「公的自己意識」(10項目)と、自分自身の考えや思考についての「私的自己意識」(9項目)の2因子構造、19項目である。「はい」から「いいえ」の4件法で、小学校高学年に適応できる。

木内(1995)は、自己を特定の他者や集団から切り離して理解する「独立的自己理解」と自己を特定の他者や社会的文脈と連結した共生的存在と理解する「相互依存的自己理解」を定義し、個人の中には独立的な自己と相互依存的な自己の両方が形成され、それらの二つの自己の相対的な優位性が社会的行動の個人差を生じさせるものであると考えた。それらの自己理解のどちらが相対的に活性されやすいかの個人差を測定するものが「相互独立・相互協調的自己観尺度」である。1因子16項目で、各項目について2つの回答(A「相互協調的自己観」回答、B「相互独立的自己観」回答)が提示され、回答者の現実の姿について「Aにぴったりとあてはまる」、「どちらかといえばA」、「どちらかといえばB」、「Bにぴったりとあてはまる」で回答する。

成田ら(1995)は自己効力感には、課題や場面に特異的な行動に影響を及ぼす自己効力感と、具体的な個々の課題や状況に依存せず、より一般化した日常場面における行動に影響を及ぼす自己効力感の2水準があるとした。そして、後者を特性的自己効力感とし、特定の状況だけでなく未経験の新しい状況においても適応的に行動できる自信となり、個人の行動を予測する上で非常に重要であると指摘し、Shererらが1982年に作成した「特性的自己効力感尺度」の日本語版を作成した。1因子、23項目で、「そう思う」から「そう思わない」の5件法である。質問に「問題対処の姿勢」を含むことが特徴的で、中学生以上の幅広い年齢

に対応できる。

Watsonらが1998年に作成した「PANAS」を佐藤ら(2001)が翻訳したものが「日本語版PANAS」である。ポジティブ情動(8項目)とネガティブ情動(8項目)の2因子16項目である。現在の気分について質問し、「びくびくした」、「機敏な」、「熱狂した」などの単語のみの質問に対し、「非常に良く当てはまる」から「全く当てはまらない」の6件法で回答する。高校生以上が対象である。

林(2004)は、6因子(全般、学業、身体、家族、社会、虚構項目)60項目であるPopeらが1988年に作成した「子ども用5領域自尊心尺度」の翻訳版の検討を行い、3因子16項目による尺度を作成した。3因子は顔立ちや見た目に関する「容姿」、理想の学力や他者との関係、容姿に関する「理想の自分」、友人関係についての「友達」である。「いつもそう思う」、「時にはそう思う」、「ほとんどそう思わない」の3件法で回答する。なお、林(2004)は、一般的な子どもの自尊心は本尺度で測定可能だが、自尊感情を低める要因を把握するには別の方法を用いる必要があるとも指摘している。

久芳ら(2005)による「『自己肯定感』尺度」は、自分自身をどの程度肯定的に捉えているかを測定する。1因子8項目、4件法である。小学生から大学生まで対象にし、項目数の少なから短時間で実施できる特徴がある。

日常生活の様々な出来事に対応して変動する自尊感情を「状態自尊感情」、状況および時間の影響が少ない平均レベルの自尊感情を「特性自尊感情」とし、前者を測定することを目的としたものが「状態自尊感情尺度」である(阿部ら, 2005; 阿部ら, 2007)。山本ら(1982)の「自尊感情尺度」を参考に作成されており、9項目1因子、5件法(「あてはまる」から「あてはまらない」)である。現在の感情について限定的に測定するため、全ての質問項目の最初に「いま」と付け加えられている。

平松(2008)はHarterが1985年に作成した「Self-Perception Profile for Children (SPPC)」を翻訳し、SPPC(日本語版)を作成した。本尺度は「自己認知側面」と「自己評価側面」の2次元6因子構造である。自己認知側面は「学業能力」、「友人関係」、「運動能力」、「容姿」、「品行」の5因子30項目、自己評価側面は「自己価値」1因子6項目である。「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法で行う。平松(2008)は「品行」因子では α 係数が高くなく、より妥当な項目選定が課題であるとしている。

中山ら(2011)は、Popeらが1988年に作成した尺度について、小学1~6年生を対象にすることを目的として「子ども用5領域自尊心尺度」を作成した。6因子35項目に加え、社会的望ましさへの反応をチェックする虚偽尺度5項目の計40項目によって構成されている。6因子構造は、「学習」(5項目)、「運動」(5項目)、「家族」(5項目)、「総合(自分自身に関する質問)」(4項目)の5因子と、「社会」(学級5項目、対人関係10項目)の肯定的側面と否定的側面の2側面(2因子)から成り、「はい」から「いいえ」の4件法である。「総合」因子は小学生には難しく、除外する余地も指摘している。

日本版Brief Core Schema Scale (JBCSS)は、Fowlerらが2006年に作成した尺度の日本語版で(内田ら, 2012)、幼少期の体験などによって形成される個人の中で安定している信念や態度であるスキーマを測定する。自己ポジティブ、自己ネガティブ、他者ポジティブ、他者ネガティブの4因子、各6項目の計24項目から成る。「はい」か「いいえ」で回答し、「はい」の場合には、その程度を「少しそう思う」、「まあまあそう思う」、「とてもそう思う」、「完全にそう思う」で回答させる。

「障害児を育てる母親の自己成長感尺度」(橋本ら, 2010)は、障害児を対象とするのではなく、育てる母親の自己成長感を測る尺度である。「思いやり」(9項目)、「精神的強さ」(6項目)、「障害理解」(3項目)の3因子18項目からなり、「全くそうっていない」から「とてもそうになった」の4件法である。本尺度は障害児を育てる母親に限定して開発されたという価値はあるが、障害児の父親あるいは健常児の母親などに適応可能かどうかの交差妥当性はまだ検討されていない。

(2) 自己記述式兼他者評定法

「PedsQL日本語版」は、Varniが1999年に開発した子どもの生活の質(QOL)の尺度である「PedsQL」を小林ら(2007)が日本語版として開発したものであり子どもと保護者を対象にしたものがある。子ども対象のものは4つの年齢区分に分かれ、5歳用が21項目、6-7歳用、8-12歳用、13-18歳用が23項目である。保護者対象のものは5つの年齢区分で、2-4歳用と5歳用が21項目、6-7歳用、8-12歳用、13-18歳用が23項目である。「身体的機能」(8項目)、「感情の機能」(5項目)、「社会的機能」(5項目)、「学校」(5項目)の4因子で、2-5歳用は「学校」が3項目となっている。「ほとんどいつも」から「ぜんぜん

んない」の5件法で、5歳以上の尺度では、小児の自己評価尺度と親の代理評価尺度が同様の内容である。自尊感情に関連する因子（感情・社会・学校）に加えて、自尊感情に影響を及ぼす自己の身体的機能に関する項目もある。

Goodmanによって1997年に作成された「子どもの強さと困難さアンケート」をMatsuishiら（2008）が日本語版作成した。「行為」、「多動」、「情緒」、「仲間関係」、「向社会性」の5因子で、各因子5項目の25項目である。情緒因子と向社会性因子の10項目が自尊感情に関連する項目で、「あてはまる」、「まああてはまる」、「あてはまらない」の3件法である。自己評価用と他者評価用の質問内容は同一である。自己評価の対象は11～16歳で、他者評価は4～16歳に対しての保育士・教師用、3～16歳に対する保護者用がある。保護者用には3～4歳対象と4～16歳対象の2通りがあり、一部の質問項目は年齢相応の内容に修正してある。

「子ども版QOL尺度」は、Ravensらが1998年に作成した「Kid-KINDL」の日本語版である（古荘，2009）。4～7歳の幼児版、8～12歳版、13～16歳版、そして2種類の親用（4～7歳用と8～16歳用）がある。8歳以上の子ども版QOL尺度は6因子（「身体的健康度」、「情緒的well-being」、「自尊感情」、「家族」、「友だち」、「学校生活」）の各4項目の24項目で、自尊感情は6因子の中の1つとして構成されている。中学生版QOL尺度の「自尊感情」因子の項目は、「自分に自信があった」、「いろいろなことができるような感じがした」、「自分に満足していた」、「いいことをたくさん思いついた」であり、「いつもそうである」から「まったくそうでない」の5件法である。親版のQOL尺度の質問内容は子ども版と同じだが、質問の前に「私の子どもは」という言葉が加えられる。

（3）小括

わが国で発表された、あるいは日本語版として開発された自尊感情等に関する尺度について見てきた。自尊感情自体を調べる尺度や自尊感情を因子の1つとする尺度があり、また方法論としても自己記述式や他者評定法などある。今回は筆者が確認できた18尺度を取り上げたが、自尊感情や自己肯定感という構成概念を測定する必要性が改めて確認できた。今後は、国際学術誌も含めた文献検討を行っていく必要があるだろう。

Ⅲ 教育行政による自尊尺度開発とその利用

（1）東京都教職員研修センターの開発した尺度

こうした流れの中で、東京都教職員研修センターは、自尊感情、自己肯定感の理解把握とその支援を目的として独自の尺度を2つ作成し、その活用法や実践例を発表している。なお、東京都教職員研修センター（2011）は、自尊感情を「自分のできることでできないことなどすべての要素を包括した意味での「自分」を他者とのかかわり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ち」、自己肯定感を「自分に対する評価を行う際に、自分のよさを肯定的に認める感情」と定義している。

「自尊感情測定尺度（東京都版）」は学校教育で求められる望ましい姿を考慮して東京都教職員研修センター（2011）が作成した。小学1～3年生用と、小学4年生～高校3年生用を対象とした、内容は同じで表現の平易さが異なる2種類がある。観点A「自己評価・自己受容」（8項目）、観点B「関係の中での自己」（7項目）、観点C「自己主張・自己決定」（7項目）の3因子22項目で、「あてはまる」から「あてはまらない」の4件法である。東京都教職員研修センター（2011）が実施した小学5年生から高校生までの平均値が公開されている。本尺度の特徴については、自己評価シート（Excelファイル）に結果を入力すると3因子のレーダーチャートが作成され自尊感情の傾向を把握でき、これに基づき、その特性や指導の方向性が説明される。自尊感情を高める指導実践も紹介され、教育現場で有効に活用しうる。

また、小学1～3年生では「そう思う」、「わりとそう思う」の高得点の傾向があると指摘し、「自尊感情の傾向を把握するための『他者評価シート』」を併用することが効果的であるとしている（東京都教職員研修センター，2012）。これは、自己評価を行うことが難しい特別支援学校・特別支援学級の児童・生徒、就学前児などの自尊感情を把握することを目的に、東京都教職員研修センター（2012）が作成した。「人への働き掛け」（4項目）、「大人との関係」（3項目）、「友達との関係」（3項目）、「落ち着き」（4項目）、「意欲」（4項目）、「場に合わせた行動」（6項目）の6因子24項目である。子どもの様子を教員等が観察し、「他者評価シート」に「あてはまる」から「あてはまらない」の4件法で回答する。各質問項目について「具体的な姿」というチェック欄が用意され、各項目で期待される生活態度や学習態度の例が示されている。「自尊感情測定尺度（東京都版）」（東京都教職員研修セン

ター, 2011) 同様, Excel ファイルの「他者評価シート」があり, 6 因子の傾向を知ることができる。また本尺度の結果を活用した, 小学校, 中学校, 高等学校, 特別支援学校における自尊感情を高めるための指導実践も紹介している。

(2) その尺度を用いた肢体不自由児の予備的検討

本論第 1 著者は肢体不自由特別支援学校教諭であり, 日々実践を通して肢体不自由のある児童生徒とかわかっている。彼らには身体・運動面の制限があるため, これと関連して自尊感情が低いことが推察されるが, 筆者の調べた範囲では肢体不自由児・者の自尊感情に関する研究は見当たらない。東京都教職員研修センターは, 先に述べた自尊感情測定尺度 (2011) で小学校 5 年生から高校生を対象に調査を行っているが, それには肢体不自由学校の児童生徒は含まれていない。そこで, 東京都教職員研修センター作成の「自尊感情測定尺度」を用いて, 肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒の自尊感情を調べ, 都の発表した通常の学級の児童生徒のデータと比較し, 検討することにした。

対象となった児童生徒は, ある肢体不自由特別支援学校に在籍する, 音声言語やサイン・手話等でのコミュニケーションが可能な小学部 2 年生から高等部 3 年生の児童・生徒 17 名 (小学部 2 年生 1 名, 小学部 4 年生 4 名, 小学部 5 年生 4 名, 中学部 1 年生 2 名, 中学部 3 年生 3 名, 高等部 1 年生 2 名, 高等部 3 年生 1 名) である。その学校の職員会議で測定の実施が認められ, また対象となった児童生徒すべての保護者と本人より承諾を得た。調査方法は, 学級担任と共に休憩中等に実施した。所要時間は一人 15 分程度である。

表 3 は, 肢体不自由児を対象とした調査結果と東京

都教職員研修センターによる通常学校の児童生徒の平均値を示したものである。高 1 男子の観点 C と中 3 男子の観点 A・C を除くすべての対象児の項目で健常児の平均値より高いという結果が得られた。観点別の平均得点では, 観点 B (関係の中での自己) が最も高く, これは全学年で共通している。予備的検討の段階ではあるが, 検討前の段階では肢体不自由児では自尊感情が低い可能性を想定したが, 結果としては同一年齢の障害のない子どもよりも高いと読めるものとなった。

この背景には, 肢体不自由学校における学習や生活の充実, すなわち, 児童生徒数が少ない中での教員や友人との関係性, 子どもの実態やニーズにあった教育課程や教育内容と学び, 子どもが自信をもって取り組むことができる活動設定とそれに対する評価・称賛などがあると推察される。また保護者の子育てのありようも当然考えるべき要因である。先行研究分析や自尊感情・自己肯定感に関係する要因などを視野に入れて, さらに検討を積み重ねる必要がある。

謝 辞

調査に快諾頂いた児童生徒とその保護者の方々, また, 測定にご協力頂いた特別支援学校の先生方に感謝申し上げます。

自尊感情等の定義分析で用いた 事典・辞典・ハンドブック

アカルド J. パスカル, ホイットマン Y. バーバラ (編) (2011) 発達障害事典. 明石書店.
安彦忠彦・新井邦男・飯長喜一郎・井口磯夫・木原孝博・児島邦宏・堀口秀嗣 (編) (2002) 新版現代学校教育大事

表 3 肢体不自由児の自尊感情尺度結果 (東京都の平均値との比較)

| 学部・学年 | | 観点 A | | 観点 B | | 観点 C | |
|-------|------|------|-------|------|-------|------|-------|
| | | 通常学級 | 肢体不自由 | 通常学級 | 肢体不自由 | 通常学級 | 肢体不自由 |
| 小学部 | 2 年生 | - | 2.63 | - | 4.00 | - | 3.86 |
| | 4 年生 | - | 3.25 | - | 3.05 | - | 2.62 |
| | 4 年生 | - | 2.63 | - | 3.43 | - | 3.29 |
| | 5 年生 | 2.95 | 3.50 | 3.05 | 3.71 | 3.04 | 3.64 |
| 中学部 | 1 年生 | 2.64 | 3.13 | 2.84 | 3.86 | 2.95 | 3.57 |
| | 3 年生 | 3.26 | 2.63 | 2.96 | 3.43 | 3.01 | 2.71 |
| | 3 年生 | 2.38 | 2.81 | 3.04 | 3.50 | 2.95 | 3.14 |
| 高等部 | 1 年生 | 2.56 | 3.25 | 2.93 | 3.64 | 2.96 | 2.93 |
| | 3 年生 | 2.42 | 3.00 | 2.80 | 3.14 | 2.79 | 3.57 |

- 典3. ぎょうせい、
 クラーク E ロビン, アダメック クリスティン&クラーク
 フリーマン ジュディス (2009) 詳解 子ども虐待事典.
 福村出版株式会社.
- 遠藤克弥 (監修) (2002) 新教育事典. 勉誠出版.
- アイゼンク W マイケル (2008) アイゼンク教授の心理学ハン
 ドブック. ナカニシヤ出版.
- 藤永保 (監修) (2006) こころの問題事典. 平凡社.
- 藤永保・仲真紀子 (監修) (2004) 心理学辞典. 丸善株式会社.
- 平原春好・寺崎昌男 (編) (2011) 新版教育小事典第3版. 学
 陽書房.
- 細谷俊夫・河野重男・奥田真丈・今野喜清 (編) (1990) 新教
 育学大事典. 第一法規出版株式会社.
- 部元雄・中野善達・伊藤隆二・水野悌一 (編) (1994) ハン
 ディキャップ教育福祉事典Ⅰ. 福村出版株式会社.
- 岩内亮一・本吉修二・明石要一 (編) (2010) 教育学用語辞
 典. 学文社.
- 海保博之・楠見孝 (監修) (2006) 心理学総合事典. 朝倉書店.
- 國分康孝 (監修) (2008) カウンセリング心理学事典. 誠信書房.
- 小宮三弥・今塩屋隼男・末岡一伯・安藤隆男 (編) (2004) 障
 害児発達支援基礎用語事典. 川島書店.
- 今野喜清・児島邦宏・新井郁男 (編) (2003) 新版学校教育辞
 典. 教育出版株式会社.
- 松原達哉・澤田富雄・楡木満生・宮城まり子 (編) (2005) 心
 のケアのためのカウンセリング大事典. 培風館.
- 茂木俊彦 (編) (1998) 障害児教育大事典. 旬報社.
- 茂木俊彦 (編) (2010) 特別支援教育大事典. 旬報社.
- 中島義明・子安増生・繁榊算男・箱田裕司・安藤清志・坂野
 雄二・立花政夫 (編) (2010) 心理学辞典. 有斐閣.
- 中野善達 (監修) (2000) 障害とりハビリテーション大事典.
 湘南出版社.
- 中谷彪・浪本勝年 (2003) 現代教育用語辞典. 北樹出版.
- ネイスワース T ジョン, ウルフ S パメラ. (2010) 自閉症百科
 事典. 明石書店.
- 日本発達障害学会 (監修) (2008) 発達障害基本用語事典. 金
 子書房.
- 日本LD学会 (編) (2011) LD・ADHD等関連用語集第3版.
 日本文化科学社.
- 日本応用心理学会 (編) (2007) 応用心理学事典. 丸善株式
 会社.
- 日本精神保健福祉学会・日本精神保健福祉士協会 (監修)
 (2004) 精神保健福祉用語辞典. 中央法規出版.
- 小此木啓吾 (編) (2002) 精神分析事典. 岩崎学術出版.
- サルデーニャ ジル, シェリー スーザン, ルッツェン ア
 ラン リチャード, ステイドル M. スコット (2009)
 盲・視覚障害百科事典. 明石書店.
- ターキントン キャロル, サスマン E アレン (2002) 聾・聴
 覚障害百科事典. 明石書店.
- ターキントン キャロル, ハリス R ジョセフ (2006) LD・学
 習障害事典. 明石書店.
- 辰野千壽 (編) (2010) 第三版学習指導用語事典. 教育出版株
 式会社.
- 氏原寛・近藤邦夫・東山紘久・山中康裕・小川捷之・鐘幹八
 郎・村山正治 (編) (1990) カウンセリング辞典. ミネル
 ヴァ書房.

自尊感情等の尺度で用いた文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2005) 状態自尊感情尺度の作成の試み.
 パーソナリティ研究, 14, 125-126.
- 阿部美帆・今野裕之 (2007) 状態自尊感情尺度の開発. パー
 ソナリティ研究, 16, 36-46.
- Brown, R. A.. (2005). The paradox of Japanese self-esteem.
 Information & Communication Studies, 32, 1-12.
- 古荘純一 (2009) 日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか.
 光文社新書, 58-77.
- 橋本真規・奥住秀之・熊井正之 (2010) 障害児を育てる母親
 の「自己成長感」尺度の作成と信頼性・妥当性の検証.
 発達障害研究, 32, 458-467.
- 平石賢二 (1990) 青年期における自己意識の発達に関する研
 究 (I) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討—. 名
 古屋大学教育大学教育学部紀要, 40, 99-125.
- 平松隆円 (2008) SPPCモデルによる大学生の自己概念の検討.
 佛教大学大学院紀要, 36, 77-89.
- 堀洋道 (監修)・山本真理子 (編) (2001) 心理測定尺度集Ⅰ—人
 間の内面を探る〈自己・個人内過程〉. サイエンス社.
- 星野命 (1970). 感情の心理と教育. 児童心理, 24, 1445-1477.
- 奇恵英 (1999) 障害児をもつ親から学ぶ. 教育と医学, 47 (3),
 19-25.
- 木内亜紀 (1995) 独立・相互依存的自己理解尺度の作成およ
 び信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 66, 100-106.
- 小林京子・池田真理・上別府圭子 (2007) 日本語版PedsQL
 (Pediatric Quality of Life Inventory 4.0 Generic Core Scales)
 の開発. 平成16～18年度科学研究費補助金 (基盤研究
 (B)) 研究成果報告書 (研究代表者上別府圭子).
- 久芳美恵子・齋藤真沙美・小林正幸 (2005) 中学生の自己肯
 定感と人とのかかわりとの関連について. 東京女子体育
 大学紀要, 41, 19-28.
- Matsuishi T., Nagano M., Araki Y., Tanaka Y., Iwasaki M., Yamashita
 Y., Nagamitsu S., Iizuka C., Ohya T., Shibuya K., Hara M.,
 Matsuda K., Tsuda A., Kakuma T. (2008) Scale properties of
 the Japanese version of the Strengths and Difficulties

- Questionnaire (SDQ): A study of infant and school children in community samples. *Brain & Development*, 30, 410-415.
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007) A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62, 589-594.
- 諸井克英 (1987) 大学生における孤独感と自己意識. *実験社会心理学研究*, 26, 151-161.
- 中山勘次郎・西山康春・柳澤登 (2011) 児童用自尊感情尺度の検討. *上越教育大学研究紀要*, 30, 63-74.
- 中山奈央・田中真理 (2008) 注意欠陥/多動性障害児の自己評価と自尊感情に関する調査研究. *特殊教育学研究*, 46, 103-113.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討: 生涯発達利用の可能性を探る. *教育心理学研究*, 43, 306-314.
- 桜井茂男 (1983) 認知されたコンピテンス測定尺度 (日本語版) の作成. *教育心理学研究*, 31, 245-249.
- 桜井茂男 (1992) 小学校高学年生における自己意識の検討 1. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 32, 85-94.
- 桜井茂男 (2000) ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討. *筑波大学発達臨床心理学研究*, 12, 65-71.
- 佐藤徳・安田朝子 (2001) 日本語版 PANAS の作成. *性格心理学研究*, 9, 138-139.
- 柴田玲子・根本芳子・松寄くみ子他 (2003) 日本における Kid-KINDL Questionnaire (小学生版 QOL 尺度) の検討. *日本小児科学会雑誌*, 107, 1514-1520.
- 菅原健介 (1984) 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み. *心理学研究*, 55, 184-188.
- Tanaka, M., Wada, M., & Kojima, M.. (2005) A study of Japanese version of the scale for the self-cognition in childhood and early adolescence. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 54, 315-337.
- 東京都教職員研修センター (2011) 自尊感情や自己肯定感に関する研究 (第3年次). 東京都教育委員会.
- 東京都教職員研修センター (2012) 自信やる気確かな自我を育てるために (発達編). 東京都教職員研修センター研修部教育開発課.
- 内田知宏・川村知慧子・三船奈緒子・濱家由美子・松本和紀・安保英勇・上埜高志 (2012) 日本版 Brief Core Schema Scale を用いた自己, 他者スキーマの検討—クラスターパターンの類型化および抑うつとの関連—. *パーソナリティ研究*, 20, 143-154.
- 内田知宏・上埜高志 (2010) Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて—. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 58, 257-266.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30, 64-68.

子どもの自尊感情・自己肯定感等についての 定義及び尺度に関する文献検討

—— 肢体不自由児を対象とした予備的調査も含めて ——

Definitions and Scales of Children's "Self-Esteem" and "Self-Affirmation"

—— Including Pilot Study of "Self-Esteem" of Children with Physical Disabilities ——

田 島 賢 侍*・奥 住 秀 之**

Kenji TAJIMA and Hideyuki OKUZUMI

特別支援科学講座

Abstract

"Self-esteem" and "self-affirmation" have attracted much attention of school educators today. This study has two aims. The first is investigation of commonality and differences between the two terms and six similar terms via review of 32 dictionaries and encyclopedias from the fields of psychology, education, and special education. We reorganized the term definitions, which were biased depending on the fields. The second aim was a review of 20 "self-esteem" scales used in Japan. Scales of two kinds were identified: Some scales specifically examine "self-esteem." Others examine "self-esteem" as one of many factors. Furthermore, two questionnaire methods were used: a self-report questionnaire and parent or teacher questionnaire. A pilot study was conducted to ascertain features of "self-esteem" in students with physical disabilities using the scale developed by Tokyo metropolitan school personnel in a service training center. Contrary to the hypothesis, "self-esteem" of these students was higher than that of students in regular classes.

Key words: Self-esteem, Self-affirmation, Physical disability

Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 今日の学校教育で注目されているトピックの1つとして自尊感情・自己肯定感がある。本稿では、自尊感情・自己肯定感、ならびにそれらに関連する6用語の共通点や差異について32冊の事典・辞典・ハンドブック（以下「事典等」とする）を用いて検討した。また、わが国で発表された、あるいは日本語版として開発された自尊感情等に関する20尺度についても検討した。さらに、肢体不自由のある児童・生徒の自尊感情について、自尊感情測定尺度（東京都版）を用いてその特徴を予備的に検討した。その結果、仮説では肢体不自由児では自尊感情が低い可能性を想定したが、結果としては同一年齢の障害のない子どもよりも高いことが示唆された。

キーワード: 自己肯定感, 自尊感情, 尺度, 肢体不自由のある子ども

* Tokyo Metropolitan Jonan Special School for the Physically Handicapped

** Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)